

構成員の皆さまへ

新型コロナウイルス感染症について(会長メッセージ)

新型コロナウイルス感染症により亡くなられた方々及びご家族・関係者の皆さまに謹んでお悔やみを申しあげますとともに、罹患された方々に心よりお見舞い申しあげます。

今世界中が、新型コロナウイルスによる感染症の脅威に曝されています。日本においても確認された感染者は1万人を超え、介護現場や保健医療福祉現場は混乱し、救急医療体制は崩壊寸前、世界経済も恐慌の一步手前、現時点でも社会全体が受けた打撃の深刻さは言葉に表すこともできません。

皆さまも全く先の見えない状況の中、感染の不安と感染させる恐怖におびえながら、日々をお過ごしのことと思います。普段と変わらず勤務されている方もいれば、テレワーク等を活用し在宅で仕事をされている方、休校になったお子さんや介護サービスが使えなくなったご家族のために休業を余儀なくされている方もおられると思います。またコロナ対策のため日常よりさらに過酷な労働環境に置かれている方もおられると思います。この厳しい状況の中であって、精神障害者の命と暮らしを守るために奮闘されている皆さまに心からの感謝と敬意を表したいと思います。

行政機関、医療機関や障害福祉サービス事業所、介護事業所等、私たちの仕事の多くは社会を支えるために必要不可欠であり、自分や家族の健康だけではなく、市民や患者や利用者それぞれ対象とする方々の命や健康や権利を守る責務を負っています。私たちはそのことに誇りをもって働いていますが、コロナ感染が拡大する中、それが二重三重にも負荷となって心身を疲弊させておられないでしょうか？構成員の皆さまには、まずはご自身とご家族の健康を守ることを第一に考えていただくようお願いします。

その上で、コロナウイルス感染拡大がもたらす様々な影響をソーシャルワーカー(以下「SWer」という。)として注視していただきたいこと、お願いしたいことをお伝えしたいと思います。

1. 精神障害のある方の不安や孤立感に寄り添ってください

今精神科病院の入院者は面会、外出・外泊などを厳しく制限されていると思います。病院にお勤めの方は、ストレスフルな環境を少しでも改善できるよう知恵を絞っていただければと思います。一方地域で暮らす精神障害者はデイケアや地域活動支援センターなどの居場所が閉じられ、望まぬ引きこもり状態に置かれています。就労支援事業所が開いていても恐怖から利用を控えている人もいるでしょう。テレビやネット上に流れる不確かな噂や情報が不安を煽っている状況もあります。緊張と孤立を深める中で、心身のバランスを崩す人が今後ますます増えてくるのではないのでしょうか。面接や訪問も憚られる状況の中、電話や手紙、メールなどの手段を工夫し、不安を和らげ、孤立を防ぐ配慮をすでにされていることと思います。地域で働く皆さまには感染対策や経営上の不安を抱えながらの運営の苦労は察するに余りありますが、なお一層の

注意を払って精神障害者の命と暮らしを守っていただきたいと思います。

2. コロナ禍がもたらす様々な社会問題、メンタルヘルズ課題に注意を払ってください

緊急事態宣言のもと、休校・休業要請がだされ、多くの人々が一日中自宅にとどまらざるをえなくなりました。そのような中、DV、子ども虐待、高齢者虐待など身近な他者への暴力が顕在化しているとの情報もあります。感染不安だけでなく経済的な不安を背景に緊張が高まり、憎しみや怒りを身近な存在に向けるのでしょうか。様々な制約から依存症の深刻化も危惧され、それが家族への暴力の背景にあることも否定できません。今後は倒産や失業に追い込まれ、経済的破綻からうつ病の発症や自殺リスクも高まるのではないのでしょうか。

ウイルスが封じられても、世界恐慌に並ぶ可能性もあるという経済への痛手は、もっとも弱い立場にある人たちを直撃し、困窮の波間に沈めていくのではないか。貧困の拡大がさらにメンタルヘルズ課題を深刻化させていくのではないか。その恐怖に身がすくむ思いです。まだ私たちが具体的に何ができるかを明示することはできませんが、SWerとして看過できないことだけは心に刻んでいただければと思います。

3. 感染した精神科患者の受け入れ体制の整備が必要です

精神科病院で陽性患者が発生したという報告が徐々に上がってきています。それだけでなく密度の高い閉鎖空間にウイルスが入り込めば、高齢者や身体合併症を持つ人も多い精神科病棟の感染爆発は避けられません。軽症の人にはできる限りその精神科病院で対応することとされていますが、感染症に関する知識や経験、あるいは地域によってもバラつきがあることが想定され、一般科と比しても少ない人員、十分な防護具の備えもなくはたして対応可能なのか、また重症化した場合に速やかに転院を受け入れてくれる医療機関はあるのか、あるいは新規の入院希望者が陽性であった場合、受け入れ拒否、たらい回しということも起こってくるのではないか。切迫した現実はずでに起きつつあると思います。精神障害があるというだけで命の選別がされてはならないことは言うまでもありません。しかし救急医療体制や精神科医療体制の脆弱さを改善しない限り、使命感や熱意だけでは命を守ることはできません。医療体制などの課題で受け入れや治療が困難とされることに対し、各都道府県がどのように体制整備をしているか、受け入れる総合病院や公立病院とのネットワークは構築されているのか、構成員の皆さまには自分の地域がどのような体制構築がなされているのか関心を払っていただきたいと思います。その不備については国や自治体に責任ある対策を講じるよう要望していかねばならないと思います。

4. コロナ感染にまつわる差別や偏見に対し、強い姿勢で臨んでください

「ホモ・デウス」の著者である歴史学者が朝日新聞のインタビューで「我々にとって最大の敵はウイルスではない。敵は心の中にある悪魔です。憎しみ、強欲さ、無知。この悪魔に心に乗っ取られると、人々は互いを憎み合い、感染をめぐって外国人や少数者を非難し始める。これを機に金儲けを狙うビジネスがはびこり、無知によってばかげた陰謀論を信じるようになる」と語っています。この悪魔はずでに跳梁跋扈をはじめ、ふだんは見えにくい社会の矛盾や病理を様々な場面で噴出させています。感染者に対する差別的な言動、医療従事者やその家族にまで及ぶという心ない仕打ち、保健所等相談窓口寄せられる理不尽な要求や苦情など、ウイルスは人

の悪意まで増殖させていくようです。エイズ、結核、ハンセン病など感染症には差別や偏見による嫌がらせが宿命のようにつきまといまいます。感染症ではありませんが精神障害者もつねに人々の無知と無理解に曝され社会から排除されてきました。精神障害者と共にそれと戦ってきた私たちは無知や偏見による差別を最も鋭く感知できる SWer のはずで、精神保健福祉士は直接的なウイルスとの戦いの最前線には立てません。しかし二次的に起こってくる差別や社会の荒廃には立ち向かうことができるのではないのでしょうか。差別を許さないというメッセージを身近な現場から地域に発信、そして社会への発信が必要ではないかと考えています。

5. こんな時こそ、つながりを大切に！

本年9月に予定されていた第56回全国大会をはじめとして協会が主催する多くの研修会やイベントが中止もしくは延期に追い込まれています。構成員同士がひざを突き合わせ、話し合う機会も奪われています。けれどつながること、悩みや問題を共有し、共に戦うことは可能です。協会が構成員の皆さまのつながりの場を提供することができるように、一人一人の声を集約し、社会へ発信すること、関係省庁に要望を挙げることなどに努力していきたいと思えます。

ぜひ皆さまの現場で、コロナウイルスの影響により直面している問題・課題について声をお寄せいただきますようお願い申し上げます。

繰り返しになりますが、私たち支援者が感染予防に対し最大限の配慮と努力をすることが、結果的には支援される方々を守ることにもなります。どうぞご無理をなさらないで、この難局を乗り越えてください。皆さまとお会いできる日が一日も早く来ることを祈っています。

2020年4月28日

公益社団法人日本精神保健福祉士協会
会長 柏木一恵